

左甚五郎 その二

福岡職業能力開発促進センター 和田 正博

1. 江戸の火事

左甚五郎、思わぬ成り行きで名前を明かすことができず『ポン助』として棟梁の政五郎が預かる普請場で働いていた。しかし、急ぎ仕事の江戸の大工の中で、上方からやってきた甚五郎はうまくなじめないでいた。

甚五郎は京都の寺社などで、金と時間に糸目を付けぬ宮大工を長年やってきた。より良いもの。千年の耐久性が求められる、ていねいな仕事を積み重ねてやってきた。しかし、江戸の町普請ではそれが通用しない。「火事とケンカは江戸の華」。江戸幕府草創期、世情が安定せず、不審火も多い。江戸の大工たちが「急ぎ仕事」に必死になるのは、このあまりに多い火事に大きな原因があった。

「関ヶ原の戦い」翌年の慶長6年(1601年)から、「大政奉還」のおこなわれた慶応3年(1867年)に至る江戸時代267年間に、江戸では49回もの大火が発生。ちなみに、京都は9回、大阪が6回、金沢が3回というから、いかに江戸に火事が異常に多かったか。

ちなみに、明暦の大火(1657年：明暦3年)では完全に江戸が焼け野原になり、10万人の死者が出たという。これは、「関東大震災」や、「東京大空襲」に匹敵する大惨事である。さらに大火以外の火事も含めれば267年間で1798回を数えと、これ以上はきりがない。異常なほどの火災都市である。「家を新築しても三年目には焼けてしまう」というのが、当時の江戸の常識。焼け出されるのは当たり前と、江戸の人々は開き直っていた。しかも、江戸初期は火消制度がまだ確立されておらず、有名な「いろは

四十八組」ができるのは、百年後の八代将軍吉宗の時代のこと。消火技術も未熟、ポンプを使った放水消火はまだまだ先の話。このころは延焼を食い止める「破壊消火」しかなかった。



Masahiro Wada

家屋の柱は2寸(6cm)程度にしておき、いざとなったらすぐ壊せるようにしておいた。ていねいな仕事よりも、プレハブのように早く安く簡単に作る事が先決だったのも仕方がない。

棟梁の政五郎は、『ポン助』が非凡な腕を持っていることを見抜いていた。できれば、その高い技術を若い大工衆に伝えて育ててほしいと思っていた。しかし、ていねいな仕事をする『ポン助』を「仕事

が遅い」と見た若い衆。『ポン助』を完全になめていた。「ここは俺の居場所じゃないのかな」と、甚五郎自身も思い始めていた。棟梁は無駄に扱われる『ポン助』の非凡な腕を惜しんだ。

ある夜、政五郎は『ポン助』に声をかけた。「ちょっとこっちに来て酒の相手してくれねえかな」そして、さかづきを何杯か重ねた後、棟梁は静かにこう語る。「お前さんもすでに分かったと思うが、江戸では十日の仕事を二日で終わらせてしまう。そのために手抜きも腕の一つになってしまっている。反対に上方では時間がかかっててもいねいに仕上げているだろ。ていねいな仕事、上方ではありがたがられるだろうけど、江戸ではダメなんだよ。江戸だけはあまりに火事早いから、手が掛けられないんだよ。ガタガタで壊れやすいものでも、早く安く作る職人が重宝がられるのが江戸なんだよ。お前さんは本当にいい腕をしていなさる。その腕を江戸で腕を腐らせてはもったいないと、おらあ思うのさ。せつかなら上方に戻って仕事をした方が良い仕事ができるんじゃないかい。もちろんすぐ帰れと言ってんじゃないよ。暮れ正月の江戸は初めてだろ。一緒に過ごそうよ。春がきて足元が暖かくなってからでいいんだよ。その時までには俺も金ためて、襟アカのつかない着物をおめえに贈るつもりにしているんだよ」

今も昔も、江戸は人情にあつい。棟梁政五郎、本音は二人で飲みながら深い話ができる『ポン助』にずっとそばにいてもらいたかった。が、政五郎、自分のことよりも、深い凄腕を持つ『ポン助』が世に出ずに埋もれるのを惜しむ気持ちが先に立って仕方がなかったのだ。もちろん甚五郎、政五郎のその気持ちが痛いほどよくわかっていた。「棟梁ありがとうよ。そこまでわしのことを考えてくれて」甚五郎は政五郎の損得抜きの友情に頭を下げた。

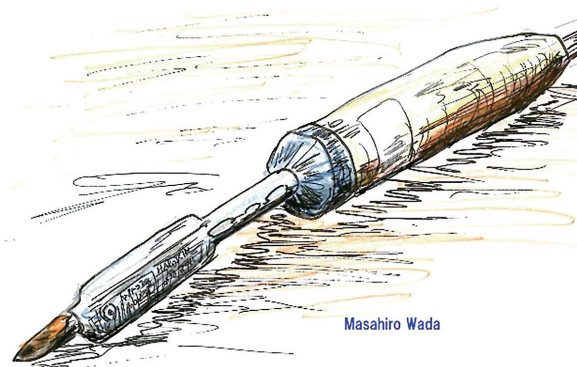
2. 現代のものづくり

時代を今に返す。最近の製造業、この当時の火事早い江戸によく似ている気がする。究極のコストダウンを求められ、品質と信頼よりも低価格化が優先。一分一秒でも早く加工するという「時短」重視

の生産現場。余分なぜい肉を落とし、少しでも安価な材料をつかい、コストを下げるのが重宝される「軽薄短小」の設計。「2枚の板を1枚にしてしまう遊びは無駄」と、やり玉に挙げられるご時世なのは今も一緒なのだ。確かに低コスト化のおかげで、ここ何十年も物価が上がらず、いろいろなものが安く手に入るのはありがたいが、品質の良いものが少なくなってきた気がする。部品の精度が悪くなった気がする。使っている材質が悪くなった気がする。品物の寿命が短くなってきた気がする。使い捨てありき。

製品の修理技術もどんどん下がってきた気がする。メーカーに修理を依頼しても基板交換・現品交換。

以前、私が、ノートパソコンを修理に出したところ、名のある大手メーカーが、新しいパソコンが一台買える高額な基板（マザーボード）交換見積もりを出してきて驚いたことがある。結局、修理を断り、そこそこの見積料だけ盗られて引き取った。でも、自分で何とかならないだろうか、ダメもとで治せないだろうか、



ネットで調べると、同じ機種、同じ症状で簡単なハンダ修理で治された方のホームページを見つけた。早速まねをして、入電部のパーツの根元、熱疲労ではく離したハンダを溶かす、簡単な修理が完了。それで治ってしまった。原因がわかってしまうと拍子抜け。「なあんだ。でも日本を代表するプロが、これをわからなかったか。ハンダもできないのかな」と、つぶやく私もちょっとてんぐになったか。

最近では、10万円以上も出して買ったスマート

フォンも3年もしたら買い替えが当たり前。その頃に時限装置が働いているがごとく故障が多発し、買い替えを促して^{うなが}くる作り。そんな物持ちの悪い品質を当たり前と思っ^{ぐち}ていいものか。

あえて、筆者の愚痴を続ける。古来、日本のものづくりは、作り手がお客さんの喜ぶ顔を思い浮かべて作っていたのが原点だった。「タチバナのおはぎ食べるとうれしくてね」「キジマの足袋は足になじむから、これ以外はダメなんだよ」というお客さんの笑顔。最近はこのお客さまの笑顔^{かみがた}を思いながら作られた製品がなくなり、売り手の財布の中身、作り手の財布の中身ばかり心配しながら作られた製品が増えたと思う。



かつて、日本はモノづくり世界一の国だった。世界に求められ、外国への技術供与をしてきた。が、この利益優先主義が災いし、お客さま第一の日本伝統の真心を伝えられず、コストカットばかりが残ってしまったのでは？と、思う。目先の利益を追う焦りの心で最近の製品は作られ、世界の品質がドンドン下がっていった。と、いうのは言い過ぎだろうか？

しかし、これだけ壊れやすいものが増えた世界。逆に、これから求められるのは、お客さまのためという真心を胸の内に秘めた職人が作る、本物の製品なのではなからうか。

3. 歳の市（としのいち）

時を甚五郎の時代に戻す。

紅葉も終わり、江戸の町。イチョウの葉を散らしながら木枯らしが吹いていた。暮れも迫ってくると、江戸の大工は、歳の市（年末の縁日）向けに端切れ（木材の余った端材）で生活用品などを作ってコヅカイ稼ぎする。棟梁は『ポン助』に「おまえさんも、何か一つ作って見たらどうだい。いい稼ぎになるよ。それで国にみやげの一つも買ってあげよ。上方の大工は彫り物がうまいだろう。恵比寿や大黒は高く売れるよ」とすすめた。



「あ」。その時、すっかり『ポン助』になりきっていた左甚五郎。「大黒」の一言で大事なことを思い出す。伏見に在住の折、江戸一の大呉服屋、駿河町の三井（現在の日本橋三越）からの依頼で大黒を彫るように頼まれていた。が、そのことをからっきし忘れていた。「大黒か、よし」やっこさ火が付い

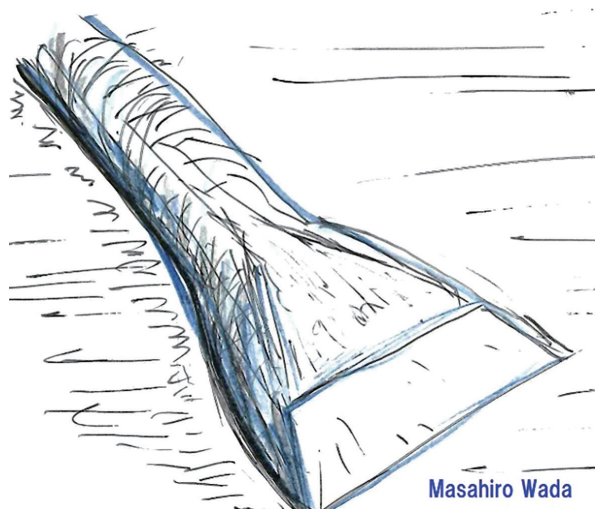
たわけだ。こういう調子だから人に仕事が遅いと
言われる。これは、あながち『ポン助』と言われても
仕方がない。

「棟梁、端切れを少しもらおうよ」「おう、いいとも
さ。下にあるから好きなだけ使いなよ」

4. 端切れ（はぎれ）

江戸初期は質の高い良い木材がまだ豊富にあった
時代。端切れとは言え、いい木材がそろっていた。
左甚五郎の神がかりの一つは材料選びにあるといっ
てよい。木の呼吸を感じ取る本能を長年の修行の末
に甚五郎は持っていた。見回すだけでよい素材がど
こにあるか勘が働く。というより、端切れのほうで
足が生えてきて、目に付く所に歩いて待っていて
いるようだ。その端切れ、手に持てばもう大黒の顔
に走る木目模様が甚五郎の胸の内に浮かんでいた。
彼は、その一つの端切れを選び出した。

この時すでに甚五郎の心の中にいた大黒は、端切
れに乗り移っているのかもしれない。甚五郎は端切
れの一つを懐に抱え、居室に戻り、そのまま床の間
に据え置いた。そして人知れず大切にしまっていた
自分の愛用の『のみ』を久しぶりに並べ、一心不乱
に研ぎ始めた。



（その三に続く）

【参考】

落語「三井の大黒」；三代目桂三木助
落語「三井の大黒」；六代目三遊亭圓生